

第128回 日文研フォーラム



アジアの西の境

The Western Boundary of Asia



ペッカ コルホネン

Pekka KORHONEN

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

アジアの西の境

The Western Boundary of Asia

● 発表者 ●

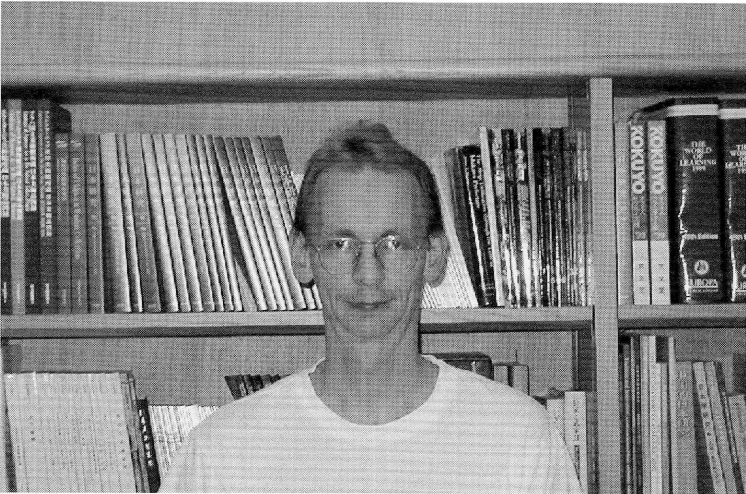
ペッカ コルホネン
Pekka KORHONEN

ユワスクラ大学 教授

国際日本文化研究センター 客員助教授

Professor, University of Jyväskylä

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



2000年4月11日 (火)

発表者紹介

ペッカ・コルホネン

Pekka Korhonen

政治学教授

フィンランド・ユワスクラ大学・社会科学哲学研究所

Professor of Political Science

Department of Social Sciences and Philosophy, University of Jyväskylä, FINLAND

国際日本文化研究センター客員助教授

Visiting Associate Professor, International Research Center for Japanese Studies

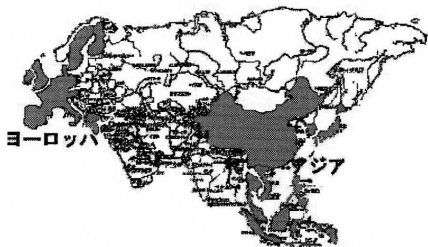
- 1955年 8月 芬蘭・スオネンヨキ町生まれ
1983年 3月 ユワスクラ大学社会科学部卒業
1992年12月 ユワスクラ大学社会科学博士
1993年 8月 フィンランド・アカデミー研究員
1996年 8月 ユワスクラ大学助教授
1999年 1月 ユワスクラ大学教授
1999年10月 国際日本文化研究センター客員助教授

主な著書・論文

- Hans Morgenthau, intellektuaalinen historia*, Jyväskylä: University of Jyväskylä, 1983.
The Geometry of Power. Tampere: Tampere Peace Research Institute, 1990.
Japan and the Pacific Free Trade Area. London & New York: Routledge, 1994.
Japan and Asia Pacific Integration, London and New York: Routledge, 1998.
'Akamatsu Kaname (1896-1974). Entwicklungstheorie in Ostasien: Das Gänseflug-Modell', *Entwicklung und Zusammenarbeit* 1999, Vol. 40, No. 6, pp. 169-171.
'Nousukkaan ja aristokratian ajat', *Kosmopolis*, 1999, Vol. 29, No. 2, pp. 7-22.
'Naming Spaces', *Fennia*, 1999, Vol. 177, No. 2, pp. 123-136.

一 問題

アジアの西の境が話題になったのは一九九六年の春だった。三月一～二日にバンコクでアジアとヨーロッパが世界史の中で初めて会議のテーブルについた。この時ヨーロッパの意味はあまり問題ではなかった。ずっと昔からヨーロッパの代表者は西ヨーロッパであり、一九六〇年代からE.E.C、そして今はE.Uがその代表者の役をしている。¹しかし、アジアには昔から同じような地域的な代表者はなかった。どんな国々が一九九六年のバンコク、そして一九九八年のロンドンのASEM会議に参加したかという点、日本、韓国、中国とASEAN七カ国²であった。そして、二〇〇〇年十月二十～二十一日のソウルの会議にも同じ国々が参加する予定である。つまり、ユーラシア大陸の東西両側にある国々が「ヨーロッパ」と「アジア」という地名を使い、お互いに話し合う。しかしその間にあるとても広い地域は何だろう。ヨーロッパの東の境とアジアの西の境はいったいどこにあるのか(図1)。



第1図 ASEM 過程におけるアジアとヨーロッパ

地理学的にはその境の場所は簡単。カラ海から始め、ウラル山脈とウラル川を通じてカスピ海に下がり、そしてカウカス山脈の南側を進み、黒海を渡り、ボスポラス海峡に終わる。アジアとアフリカの境はスエズにある。しかし、この地理学的な境は文化、政治、経済、人種、宗教等の分野では全く意味がない。歴史的に見てもこの境はロシア帝国の中の一つの境界線に過ぎない。意味のない境は本当の境ではないので、もつと具体的な境を探さなければいけない。

このことを考えると、特にアジアの場合にはおかしなことが分かる。地理学的なスペースは普通五つの方面に分かれる。つまり中心と東西南北の四つの方向である。ヨーロッパの東の境がはつきり見付からなくても中欧、北欧、南欧、東欧と西欧が確かに会話の中によく出て来る。アメリカ大陸の場合にも同じように北米、中米と南米があるし、東海岸と西海岸に分けている。アフリカも同じであり、同じ四つの方面がある。しかし、アジアは違う。アジアの場合には東アジア、東南アジアと南アジアに簡単に分けられる。一九九一年から中央アジアという地名も国際政治学の論文とマスコミの中によく出ている。中央アジアという地域は普通旧ソ連圏のアゼルバイジャン、アルメニア、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、グルジア、タジキスタン、とトルクメニスタンのことを表している。³

中央アジアの北側に北アジアがあるはずだが、そうではない。北アジアという言葉はほとんど使われていない。一九九四年から *British Business Monitor International* という会社が *China & North Asia Monitor* という雑誌を出版しているが、その「North Asia」とは香港、台湾、北朝鮮と韓国のことである。また日本をこれに入れると、現在日本語の「北東アジア」という地域が出てくる。中央アジアからけっこう離れているし、方向もおかしい。中央アジアの西側に西アジアがあるはずだ。一〇〇年前によく本に出ていたが、現在は西アジアもほとんど使われていない地名である。中近東という地域は西アジアの部分を満たしている。「東」と「アジア」はある意味で似ている、どちらもヨーロッパから東の方にある。しかし、同じではない。北アジアと西アジアはあまり存在していない。現在の用語の中で東アジア、南アジアと中央アジアが全てのアジアを表している。どうしてだろう。

一 一 隱喩

隱喩というのは意味が何回か変わった単語のことである。名前はほとんど全て隱喩である。隱喩は容器のようなものとして考えられる。その容器の中に色々な地理学、哲学、文化、政治、経済、宗教、民族学、語学等の分野から取った意味が入れられる。⁴そして、また意味がなくなる可能性もある。長い歴史を考えると、一つの隱喩の内容は何回も大きく変わるのが普通である。しかし、この変化は遅い。短い時間、例えば人生の瞬間みたいな短期間の場合には隱喩は容器のようなものには見えない。固定した言葉だけに感じ、意味が大きく変わるといようなことは普通考えられない。

地理学的な隱喩は地域的なアイデンティティーと地域的な統合の研究にとって面白いものである。固定したものに感じるので、自然にどんな国とどんな民族が同じ運命圏に入り、どんな国と民族をその運命圏の外に残すかというような議論に強い影響力がある。ヨーロッパ人が *Europa* をいう時にヨーロッパ人同士だけの運命を考え、日本人は「東洋」という時に普通日本、中国、韓国のことしか考えない。「アジア」という隱喩はこの意味でとても複雑な単語である。四五〇〇

年ぐらゐの長い歴史の間に意味が何回も大きく変わり、地中海、ヨーロッパ、中国、日本などでその容器に色々な意味を入れたり出したりしたのである。その歴史を見ればアジアの西の境の謎が分かる。

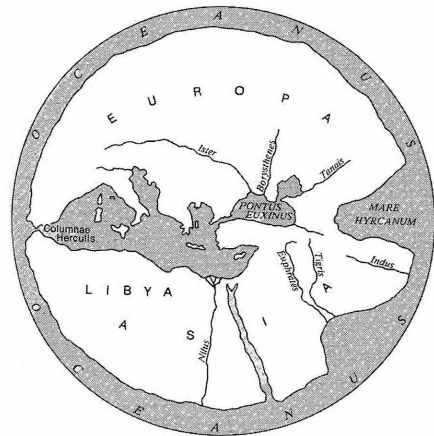
二 地中海のアジア

アジアという隠喩は元々ヨーロッパ製ではない。地中海の文化圏で使い始めた言葉である。四五〇〇年前にアツカド語の「アースー」(asu)は日の出という意味であった。これが「アジア」の起源である。「エレーブ」(erebu)の意味は日の入りであった。⁵「Europa」、そして北西アフリカにある「マグレブ」(Maghreb)とさう二つの地名がエレーブから出来ている。この二つの言葉がアツカド帝国で地理的と政治的な意味があったかどうかは知られていない。しかし、太陽の動きは大体どこでも地理学的な意味を持つ。アジアの元々の意味は「日本」という国号の意味とほぼ同じだということは偶然ではない。太陽、東と西、そして地理的なアイデンティティーは昔から一緒になっている。「日本書紀」を書い

た日本人は自分のいる場所は世界の中心から東にあるというふう考えたようである。中国語の「東」の漢字も木の後ろから昇って見える太陽の絵だ。地中海でもオリエントという言葉がラテン語の *oriens* — つまり上がる、— という意味から発生し、オクシデントが *occidens* — 沈む、— から出来た言葉である。地中海の東部に對して使われる *Levant* の地名のルーツはスペイン語の *levantar* — 上がる、— である。英語の *east*・ドイツ語の *Ost*・スウェーデン語の *öster* 等のインドゲルマン語族の東という意味で時にはアジアのシノニムとして使われる言葉の言語学的な起源はラテン語の *aurora* — 朝焼け、— と同じである。フィンランド語の同意味の *itä* の起源は *itā* という動詞の発芽という意味から出来、つまり太陽がゆっくり東のホライゾンから空に芽ぐむ。またアラビア語のシャーク (*Shark*)、地中海の東部にあるアラビア語圏、北東アフリカとアラビア半島に對して使われる地名の元の意味は日の出である。また地中海の西部、特に北西アフリカのモロッコ、アルジェリアとテュニジアに對して使われるマグレブ (*Maghreb*) は四五〇〇年前のアツカド語のエレーブから作られた地名である。つまり、語源的にはヨーロッパとマグレブは同じ地域だが、そのことは一般に知られていないので、同じ運命圏に入っているという議論は少ない。

アッカド帝国は後の地中海の文化に大きな影響を与えたが、「アースー」の動き方ははっきり分からない。二〇〇〇年後、アースーはもう地名になっていた。紀元前五〇〇年ごろギリシア人のヘカタイオス (Hekataios) という地理学者の世界図の中にヨーロッパとアジアの地名が両方とも出ている。ヘカタイオスの世界図は丸く、中心はギリシア人が住んでいる地中海の東部、その周りに大きい島のような土地、そして周辺には世界海であった。しかし、ヘカタイオスには東西の区別が大事ではなく、南北の区別を使っていた。そのせいで地中海の北側はヨーロッパになり、南側はアジアであった (図2)。

一〇〇〇年後ヘロドトスの歴史書はアジアからリビアという大陸を分けた。リビアは地中海の南なので、アジアはまた東の方向に戻り、ヨーロッパは世界の北西

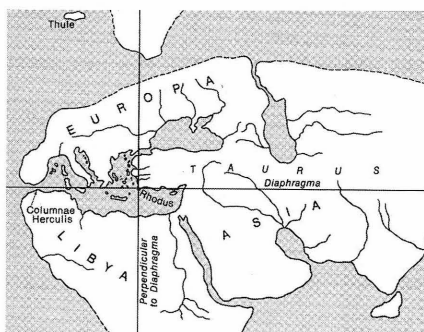


第2図 ヘカタイオスの世界図の復元
Edward Herbert Bunbury (1883) A History of Ancient Geography among the Greeks and Romans from the Earliest Ages to the Fall of the Roman Empire; republished (1959) New York: Dover, vol. 1, map facing p. 148.

部の地名になった。ディケールプス (Dicaeopus) の紀元前三世紀に書いた世界図にこのパターンが見える (図3)。三つの大陸の中でアジアは日の出の方向にあたる一番大きい大陸であった。この後は地名についての大きな変化はなかった。リビアの地名は少しずつアフリカに替わっただけである。

しかし、アジアという隠喩に新しい意味が入り始めた。ギリシア人は世界の中心部の人間なので、

アジア人でもヨーロッパ人でもなかった。例えば、アリストテレスの「政治学」の中に色々な民族の描写がある。⁷ アジアは勿論文明の大陸で、ヨーロッパは野蛮の大陸であった。従って、アジア人はインテリジェントな人間だが、自由でないので、大きい帝国に住んでいる。ヨーロッパ人は自由だが、残念ながら馬鹿なので、適当なポリスが作れない。ギリシア人だけは自由にインテリジェントで良い性質を持つ人間であり、アジアとヨーロッパの海岸に住み、ちゃんとした小さな国家で自由な文明生活をしていた。⁸



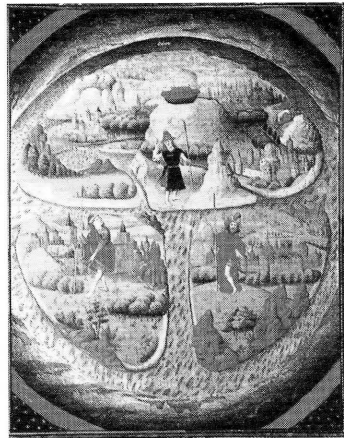
第3図 ディケールプスの世界図の復元
J. B. Harvey and David Woodward
(eds.) (1987) *The History of Cartography*, Vol. 1, Fig. 9. 2.

ローマ帝国時代にアジアとヨーロッパは別の政治的な意味はなかった。地名として知られていたが、たいして使われていなかった。ローマはヨーロッパの帝国ではなく、地中海全体の帝国だったが、実際にはローマ人の自己意識では世界帝国だった。昔の中国の自己意識に似ているが、文明はローマだけではなく、アジアにもあった。ヨーロッパとアフリカは危険な野蛮人が住んでいる地方であった。従って、ローマ帝国を通じてアジアの文明がやがて西の方に流れ込んだ。エジプトの宗教、東地中海のヘレニスチックな哲学、そしてユダヤのキリスト教がヨーロッパに広がった。結局、文化の面で見れば、ローマ帝国はアジア的な文化圏に変わった。このアジアに対して深く敬意を表する態度がヨーロッパの文化に入った。後にヨーロッパが強くなってアジアを軽蔑する態度も表われたが、元の尊敬の流れは完全には消えなかった。現在でも、もしアジアに文化、美術、経済発展等の分野で優れたものが現れれば、それを誉めたたえる者がいつも出てくる。

ローマ帝国が終わった後中世のヨーロッパはキリスト教的な世界観を持つており、新しい種類のマップエムンディ (mappamundi) と名付けた世界図をつくり始めた。キリスト教伝道のための地図だが、キリスト教はアジアの宗教、ヨーロッパは野蛮人の周辺地域ということがこのタイプの地図でよく分かる。地球はギリ

シア人が想像したように丸く描いたし、人間が住んでいる世界の周りには海だった。三つの大陸の間にもはつきり海を描いた。バイブルに物語られていることは全てアジアで行われたので、アジアを一番尊敬された大陸として、上に置いた。オリエンテーションという現在の言葉はマップ・エムンディから伝わった言葉である。つまり、オリエントを一番上に置いてから他の地域をその下に合わせるという意味であった。パラダイスはアジアの一番遠い所にあり、「ノアの方舟」がアジア大陸に流れ着き、人類は全てアジアから世界中に広まり、キリストがアジアで生まれた。だからアジアは敬意に値する大陸であった。

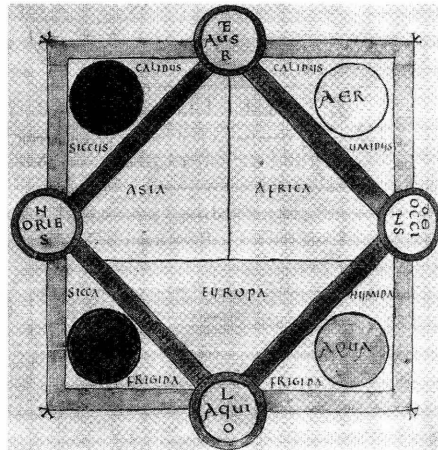
マップ・エムンディには色々な形があったが、このTのパターンが一番多い(図4)。ヨーロッパを一番下に置いた九世紀に描かれたマップ・パエムンディもある



第4図 ノアの三人の息子。ジャーヌ・マンセルというフランス人が15世紀に描いたマップ・エムンディ。アジアにシエム、アフリカにハム、そしてヨーロッパにジャフェットが立っている。
J. B. Harvey and David Woodward (eds.) (1987)
The History of Cartography, Vol. 1, Plate 12.

(図5)。この頃「アジア」は特別のキリスト教的な意味を持っていたが、「ヨーロッパ」は普通使われる言葉ではなかった。

一〇〇〇年のころ、ヨーロッパの隠喩にまた新しい政治的な意味が入って来た。スペインでイスラム軍と戦ったフランク人がそれを自分の軍隊に対して使い始めた。理由ははっきり分らないが、フランク兵の中に恐らくキリスト教徒も異教徒も入っていたので、両方とも含める掛け布団みたいな言葉として使われたのだろう。しかし、キリスト教とイスラム教の対立はまだそれほど激しくはなかった。どちらも異教徒と争っていたし、カトリックキリスト教の一番大きな敵はオルトドクスキリスト教(東方正教会)であった。従って、ヨーロッパとイスラム教の対立があってもヨーロッパとアジアの対立はなかった。そして、ヨーロッパから見れば、イスラム教もまた長い間文明の内に入っていた。ヨーロッパ



第5図 ヨーロッパを下に描いたマップエムンディ。ベデが9世紀に書いた Do natura rerum より。
J. B. Harvey and David Woodward (eds.) (1987)
The History of Cartography, Vol. 1, Fig. 18. 38.

パ人で特にスペインのイスラム大学に入り、ギリシャ哲学、インドの数学、アラビアの世界地理学などを勉強する者もいた。

一四五三年にトルコ軍がコンスタンチノーブルを奪取した。オルトドクスキリスト教がそれで弱くなったので、二つのキリスト教の対立は意味がなくなつた。ピウス二世がトルコイスラムに対抗して汎キリスト教同盟を結成しようとしていた。キリスト教内の紛争をかたづけける為⁹に宗教的な意味が全く入っていない「ヨーロッパ」の地名を使い始めた。この結果「ヨーロッパ」が一般的に使われる言葉¹⁰になつた。

同時に、地理学も発達し、新しい種類の地図が少しずつ描かれ始めた。しかし、世界地図は北が上になつたのに、その精神的なモデルはまだマツパエムンデイであつた。だからアジアとヨーロッパの区別ははっきり描いてあつた。二つとも大陸であるから、その間には水があるべきであつた。ロシアはまだモンゴル占領下だったので、ロシアの領土の形も完全に分からなかつた。それでアジアとヨーロッパの間に川を想像した。その線は色々な処を走っていたが、大体二つのパターンが普通であつた。一つは黒海から直接北の方に描いた川であつた。そのような川は普通日本製の南蛮図にも見られる。そして、もう一つは黒海からデニエペル川

とラドガ湖を通って白海までの線であった。この線は政治的な意味もあった、つまりヨーロッパの東の境はスウェーデン、ポーランドとオーストリアの東の国境で、アジアの西の境はモンゴル占領下のロシアの国境であった。ウクライナという国号はロシア語の *Україна* 境、という言葉から出来た。¹¹ この頃にはアジアの西の境がはっきり分かった。本当の地理学上でそれを森の中で見付けるのは無理だったにもかかわらず、概念としてその境は地図に出ていた。中央アジアという地名は、やはりこの頃カスピ海の東部のモンゴル民族の出身地域を示すために出来た言葉である(図6)。

これまではヨーロッパは比較的弱く、周辺地域であった。西ヨーロッパのカトリックの中だけで使う地中海生まれの世界観は特別に問題にはならなかった。しかし、一五〇〇年代に航海・探険による海外進出が始まると、地中海の地方で意味がある地理概念が他の文化の地理概念とぶつかった時、問題なく通じたというわけではなかった。日本の場合には別に問題はなかった。南蛮図はある意味で

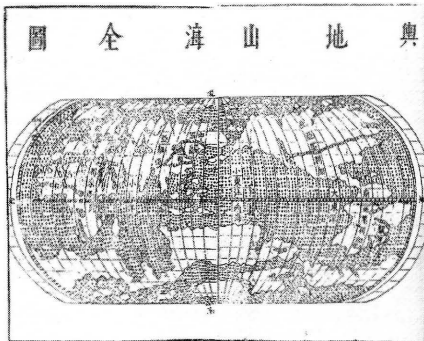


第6図 ヨドコ・ホンディウスのアジア新図、1600年代の終わり頃。京都大学図書館、室賀コレクション。

天竺図に似ていて、地名はほとんどなかった。そして裝飾（オーナメント）として使われたので、別に深い意味の地理概念はなかった。中国の場合は違った。Asiaは亜細亜に替わってしまった。

四 中国のアジア

十六世紀に日本と中国に来たイエズス会の神父達の世界観の基本はマツパエムンデイであった。そして、自らのヨーロッパも文明世界の内に入ったので、ギリシア哲学も強く教育の対象に入れられた。だから彼らのアジア観はアリストテレスとキリスト教のミックスであった。大変苦勞させられてもアジアを尊敬し、中国と日本をほめるレポートをヨーロッパに送った。例えば、アルヴァーロ・セメード (Alvaro Semmedo) の「シナ帝国



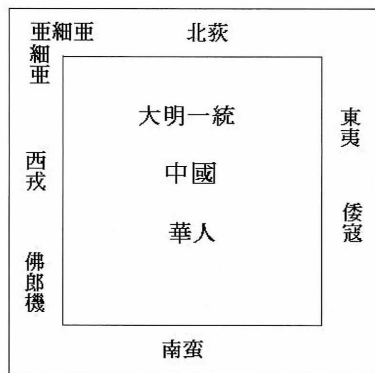
第7図 マットオ・リッチの1584年の輿地山海全圖。岡本良知（昭和48年）16世紀における日本地図の発展、226頁。

志」に次のように書いてある。

アリストテレスは、アジアは智においてヨーロッパに
優り、ヨーロッパは力においてはアジアに優る…¹²

力においてもアジアの方が強かっただろうと思う
が、それは今は問題ではない。問題は、なぜアジア
という隠喩の意味が中国語に翻訳された時に突然大
きく変わったか。亜細亜の漢字はともおかし。い。
価値のない、狭い地域というのは、あまりあの時代

のイエズス会のアジア観に当たらない。漢字で書いた亜細亜の地名はマッテオ・
リッチが一五八四年に描いた世界図の中に初めて出ている（図7）。リッチはそ
の時中国に来たばかりで、まだあまり中国語は出来なかった。だから彼は自分で
地名の翻訳をしなかったのだろう。中国人の友人が手伝ったし、中国人の官僚
「司賓」が一番最後にリッチの地図を認めた。¹³ だからリッチの地図の地名は中華
的な考え方を示している。中国は中原で、亜細亜という地域に入れるというよう
な考え方は無理だった。中国を中心に考えようとした（図8）。つまり、西から来
た変な坊さんのかっこうをしていた仏郎機（フランキ）が下手な中国語で語った



第8図 中国地理学的な亜細亜観

「Asia」という地域はやはり東夷南蛮西戎北狄、倭寇等の野蛮人が住んでいた、大明帝国の周りにあった価値の少ない、狭い地域であった。そのように考えると、亜細亜の漢字名は理解出来る。

また、亜細亜の西の境は全くなかった。中国の古い地理意識には外の境はなかったからである。実際、リッチの一五八四年の世界図にはまだ歐羅巴の地名はなかった。中国の官僚はヨーロッパ人が自らに対して使っていた地名と民族名を認めなかった。だからあの地図ではヨーロッパも亜細亜の内であった。

五 ロシアのアジア

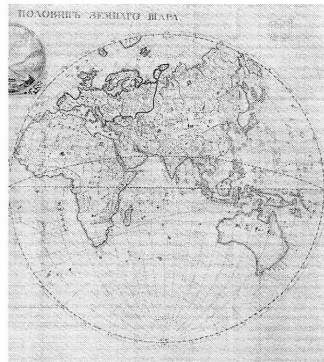
十五世紀から十七世紀にかけてモスクワ公国が少しずつモンゴルの勢力から自由になり、自分の勢力圏を広げて、ロシアの小さな公国を統一した。オルトドクス（正教会）であっても、キリスト教国としてイスラム教のモンゴルと戦ったので、やがて西ヨーロッパでロシアのイメージが変わってきた。十七世紀の終わりにピョートル一世が「脱亜入欧」の政策を始めた。一六九七年にインコグニト

(変名) でオランダを訪ね、後に大勢の留学生を西ヨーロッパに派遣し、新しい技術、知識をロシアに導入し、専門家等を招いた。ロシア国土全体も西の方に動かした。つまり、何回もスウェーデンと戦争をし、ロシア国土をバルト海の海岸まで広げ、新しい首都をネバ川の河口に建てた。概念としてもロシアをヨーロッパに動かした。ロシアの地理学者に「新しい地図を書け」という命令をした。従って、一七三〇年代にワシリ・タチシチェフ (Vasilii Tatishchev) が新しい地理学議論を興した。アジアとヨーロッパの境は水で決めるのは意味がなく、ウラル山脈の方が自然的な境である。¹⁴

スウェーデン人のフィリップ・ユーハン・ストラレンバリ (Philip Johan Strahlenberg) という士官が一七〇九年に捕虜になり、長い間シベリアで過ごし、新しいロシア地理学を学んだ。スウェーデンに帰国してからその新しいヨーロッパ概念をヨーロッパの地理学者たちに伝えたが、定説にはならなかった。十八世紀、十九世紀中頃これについての議論が盛んにあった。本来地理学的に見ればアジアとヨーロッパは別の大陸ではない。境をウラルに置くのは政治的な意味があっても、地理学的な意味はなかった。ヨーロッパは小さく、アジアは大きいので、大陸全体にアジアという名を付けたら良いという議論もあった。アジアは大陸で

あり、スカンジナビア、ヨーロッパ、アラビア、インド、中国とインドシナは全部半島という意見もけっこう強かったが、一八八五年にチエコ人のスエス (F. Sues) という地理学者がユーラシア大陸という地名を作ってから議論が少なくなった¹⁵(図9)。

このようにロシアが脱亜入歐を果たし、新しいヨーロッパの代表者としてヨーロッパ文明をアジアに広げた¹⁶。この過程の一つの結果としてアジアの西の境も北の境も不明になった。学校の地理学の教科書を別にして、地理学的なアジア解釈はもうこれから意味がなくなった。政治的、経済的、民族的、言語学的な解釈しか意味はない。エドワード・サイードの「オリエンタリズム」のような論文にこの新しい十九世紀のアジア解釈が詳しく研究されているが、英語で出ている本は大体全部西欧と南欧のことしか語らない。中欧と北欧のことはそれほど知られていないだろう。



第9図 地球半球総図部分 寛政6年=1794年船越昭生(1986年)鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究、図15

六 芬人のアジアの旅

地理学上でアジアの西の境が東に動いたが、同時にその境は民族学上で西に移った。言語学の研究は特に十九世紀になってから発達した。それまでヨーロッパに色々な言葉があることを気にしなかった。神が人類の言葉を混合したというバイブルの一つの物語によってこれを当然のこととして考えた。

しかし、一八〇〇年代にインド・アリアン語族の形が少しずつ見えて来た。ハンガリー人とエストニア人も同じであるが、特にフィンランド人がアジアに関係のありそうな変わった言葉を話している(例1)ということは大きいセンセーションになった。一八五三―五五年にフランス人のデゴビネー(A. de Gobineau)がアリアン論を出版した。その中に *le Finnois* がヨーロッパの中のモンゴル人としてよく出てきた。この説は第二世界大戦の後消えたと思つたが、そうではなく、一九八四年出版の「大漢和辞典」にまだ出ている。

【**芬人**】 種族の名。亞洲人種の一派。歐洲の芬蘭にをり、頭は大きく圓く、顔面は扁平、

talo
-pa
-n
-on
-lle
-a
-ko

家はのになへをか

例1 日本語と芬語の比較
どちらも膠着言語で前置詞を使わずに名詞の後に文法を表す助詞を付ける。例の場合には助詞の発音が似ているし、意味がほぼ同じである。

顴骨は隆起してゐる。Fimsの譯。¹⁷

これはほとんどデゴビネーの説だが、彼によればフィン人の頭は圓くはなく、四角形であつたし、髪の毛が黒く、目がつり上がった形で、身長は一五〇センチくらいであつた。性格は愚かで野蛮。実際にはフィン人は統計学上ノルウェー人とスウェーデン人に続く世界三番目の金髪を持つ民族で、顔の形と身長の間でも他の北欧の人種とは違わないが、デゴビネーは一人も本当のフィン人を見ないで、どこかからもらった頭蓋骨だけで研究した。

一八七〇年の独仏戦争の後でアリアン論が一般的になつた。戦争中に自分の研究室が被害を受けたフランス人のデクアトロファーージュ (A. de Quatrefages) という民族学教授が、ドイツ人はアリアン人でなく粗暴フィン人だと騒ぎ始めてから大きな Finnenfrage (芬人論) という議論になつた。つまり、ドイツ人はどこまで野蛮なモンゴル人か、どこまで清潔なアリアン人か。やはりドイツ人もアリアン人になりたくて自分より東にある民族をモンゴル人と呼び始めた。¹⁸ その議論から Homo Europaeus の概念が一般の人の間に広がつた。つまりヨーロッパ人が人類の一番優れた民族で、他の民族全てに戦いで勝ち生き残る。ヒットラーの第二次大戦中の民族政策はこの芬人論の一つの結果である。

ヨーロッパとアジアの人種的な対立の議論は一八〇〇年代の終わりごろに一番激しかった。日本と中国に対する「黄禍論」はある意味で芬人論の続きであった。ヘルマン・クナックフス (Hermann Knackfuss) が一八九五年にウイルヘルム二世独国皇帝が日中戦争の時想像した黄禍 (die gelbe Gefahr) とくう絵を描き、そしてウイルヘルム二世がそれをいとこのニコライ二世露国皇帝に送った。仏像の形をした日本が脅威としてヨーロッパの東の地平線の上になるといいう、この絵はヨーロッパでとても人気になり、幾つかの新聞記事となり、また模倣された。

アリアン論の中にはアリアン人は美しく、亜細亜人は醜い。民族学論文でこのことを写真で証明した。つまり亜細亜人の場合には仕事の途中で撮ったなるべく汚い恰好をした肉体労働者の写真を本に入れた。日本の場合にはこのやり方は日露戦争後で変わり、上流階級の若くて美しい女の子の写真を使い始めた。日本人は美しい民族としての印象に戻った。軽蔑されたアジア人種としてヨーロッパにいるのは難しかったので、フィン人もヨーロッパに帰りたいかった。ヨーロッパに帰る為にポルドもビューティフルでなければならなかった。フィン人の場合には適当な戦争まで時期を待つのは日本よりもっと時間がかかった。一九一七年の独

立戦争は影響はなかった。ロシアにはもう実際の中央権力はなかったので、大体フィンランド国内の白軍と赤軍の戦いだけだった。一九二〇年代のフィンランドでどんなところがビュートイー・コンテストに進み始めたかというところ、外務省だった。その外務省が美しい芬女の写真をヨーロッパ中の新聞と雑誌に送った。結局一九三九―四〇年の冬戦争でフィンランドがソ連と共同で、十分な戦力を示したのでこの別嬪外交はもう必要なくなった。¹⁹

民族学的なアジア論の中でアジアの西の境は幾つもあった。つまり、「アジア的」ということに幾つかのグレイドがあった。北西ヨーロッパ、つまりノルウェーとスウェーデン人はほとんど純血なアリアン人として認められた。フィンランドとスウェーデンの間にあるボトニア湾が北欧でのアジアの西の境であった。イギリスも割とピュアーであった。今でもイギリス人は「The WOGS begin at Calais」という表現を知っている。²⁰ フランスとドイツ、ドイツ・オーストリアとポーランド・チェコ・ハンガリー等、それらの国々とロシアの間、そしてまたロシアの国内にある程度のアジアの西の境があった。

七 東

「アジア」、「オリエント」と「東」は意味として似ている。一八〇〇年代の西ヨーロッパから見れば全部ある程度ヨーロッパの外、日の出の方にある地域を示している。しかし、意味が少し違った。民族学の「アジア的」は一番広い意味があったが、「アジア」の意味がそれより狭く地理学的な意味に限られていた。「東」と「オリエント」の方が広がった。

「東」と「西」の元々の区別はキリスト教内の区別であった。現在でもヨーロッパの中にその宗教と文化的な境が残っている。その線の両側に幾つかの民族が分かれている。北から言えばフィンランド人はまずスウェーデンからカトリック教とその後ルター派プロテスタント教を受け、「西」にいる。千年前のカレリア人は同じフィン人であったが、ロシアからオルトドクス教を受け、今「東」にいる。エストニア人とセテユ人は同じように分かれている。ポーランドとベラロシア、クロアチアとセルビアも同じく「西」と「東」の反対側にいる。²¹この境は宗教だけによるものではない。千年の間に元々の方言ぐらいの語学的な区別がやがて二つの違う言葉になった。家族の構造が変わり、「東」に大きい家族があり、「西」

に核家族があるのが普通であった。現在の核家族とは違うが、昔から異なる世代が近くにいても違う家に住むのが普通であった。農業のパターン、特に小作人が自由に経済活動を行い、自由に引越しが出来たか、或いは同じ土に束縛されていたかはもう一つの区別である。換言すれば、現在の「東」と「西」の区別は五〇年前の「ヨーロッパ」と「アジア」の区別と同じようなものである。

「オリエント」という言葉にも宗教的な意味が強い。オルトドクスキリスト教も時には「オリエント」の内に入るが、特にイスラム教の場合には「オリエント」のイメージが強い。また、オリエントの起源はラテン語の *oriens* なので、ラテン系の言葉では、それを普通イスラム教に対して使うが、ゲルマニック系の国語でもイスラム教に対して「東」という言葉を使う。従って、英語の *Near East*、フランス語の *Proche-Orient* とスペイン語の *Oriente Próximo* —つまり近東、は普通北アフリカのイスラム教圏を示していた。中央ヨーロッパのドイツ、オーストリアとイタリアから見れば近東の場所が違った。ドイツ語の *Naher Osten* と *Nahost*、そしてイタリア語の *Vicino Oriente* は普通トルコ帝国の占領下のバルカン地域を示した。Middle East・フランス語の *Moyen-Orient*・スペイン語の *Oriente Medio*・そしてイタリア語の *Medio Oriente* —つまり中東、は場合によつ

て地中海の東部からアラビア半島、ペルシア、アフガニスタンと時にはインドのことを示した。ドイツ語の *Naher Osten* の意味にはバルカンからインドまでの地域が入っていた。「極東」は勿論「東アジア」と同じ意味であった。第一次世界大戦の後トルコ帝国が潰れ、バルカン諸国が独立し、バルカンは少しづつオリエントの意味から外れていった。第二次世界大戦の後、北アフリカの独立した国々に対しても「近東」という言葉はあまり使われていない。それで「近東」と「中東」の区別も意味がなくなったし、「近東」がないと「極東」も意味がない。

しかし、どんなヨーロッパの国語を見ても、一八〇〇年代の「中東」と同じ意味の言葉がある。地中海の東部からパキスタンにかけて使われている *Middle East* は一番普通のこの地域に関する地名である。「アジア」という地名をほとんどの場合に全く使わない。ある意味でこの地域はロシアと同じように「脱亜」をしたのだが、「入欧」はしていない。ヨーロッパでもなくアジアでもない特別なイスラム教の地域になった。ヨーロッパが弱くなってから一般のマスコミ等の分野で気がつかないうちにヨーロッパの地理学的な地名はもう大分変わってしまった。

八 日本のアジア

南蛮のキリスト教を別にすれば、日本人がヨーロッパの世界観に興味を持ち始めたのは一七〇〇年代の始めからである。東洋における亜細亜の概念の歴史はほとんど全て日本だけにある。歴史的に見れば中国と朝鮮・韓国人はアジアに特別な興味を示していない。新井白石の「西洋紀聞」は普通洋学とか蘭学の出発点として認められている。その関心の原因は脅威感ではなかった。出島の紅毛人を特別に危ない者として認めなかった。何故西洋の地理学に興味を持ったかという点、西洋地理学は中国地理学と違っていた。日本の国号は幾ら美しくても日本人は中国から見れば東夷とか倭人であり、儒学を幾ら学んでも文明化した東夷に過ぎない。一七〇〇年代のヨーロッパ地理学の中にこのような概念はまだあまりなかった。そして、亜細亜という漢字が悪いということに気がついた。その漢字はヨーロッパ人が付けた字だと思い、亜細亜を軽蔑的な地名と思った。亜細亜人になる

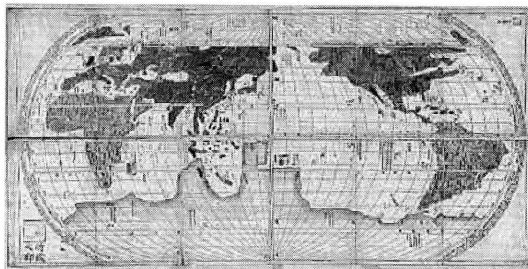


第10図 長久保赤水の地球万国山海輿地全図説、1788年頃。京都大学図書館、室賀コレクション

気はなかった。²²

それにもかかわらず、西洋地理学に興味があった。鎖国時代に書かれた西洋式の世界図はけっこうある。普通はマッテオ・リッチの世界図を元にして描かれたものである。全部がそうではないが、幾つかの地図の特徴は亜細亜の西の境である。例えばこの一七八八年ごろに書かれた世界図にその日本的なアジア解釈が見える(図10)。もし日本がアジアの国であれば、アジアは他にどんな国々があるだろうか。アジアに日本、唐土、天竺、朝鮮等があると特別に書いてある。つまり、昔から日本と関係があった中国印度文化圏だけをアジアに入れている。ヨーロッパ製の地図にアジアとヨーロッパの境が北から南に走ったので、この地図にもシベリアが大きく入ったが、アラビア半島はヨーロッパの側に置いてある(図11)。自分に関係がないイスラム教の地域を自分の仲間に入れる意味もない。

日本は一八五四年に開国をして、一八六八年に明治維新を行い、一五〇年前のロシアと同じような脱亜入欧政



第11図 稲垣子戩、坤輿全図、1802年。京大大学図書館、室賀コレクション

策をしていた。アジアに関心が戻ったのは岡倉天心の時である。一九〇二年インドで書かれた「東洋の理想」の最初の文章は有名になった——アジアは一つである。²³

しかし、天心のアジアに何が入っていたか。ある意味で天心のアジアは非ヨーロッパであった。ロシアのシベリアを除けば全部入っていた。日本人もアラブ人も、モンゴル人もシャム人も。しかし、同じ程度では入っていなかった。西洋人がヨーロッパにプライドがあつたと同じように天心もアジアのことを誇りに思つた。西洋人がアリアン論でヨーロッパを格付けしたと同じように天心もアジアにグレイドを付けた。ある所にアジアの性質は強かつたが、ある所に弱かつた。天心のアジア論の中で一番アジア的な国はやはりアジアの博物館としての日本であつた。その次が中国とインドであつた。イスラム教について天心は次のように述べた。

イスラム文化自体、いわば騎馬にまたがり、剣を手にした儒教だと見なすことも出来る。

この文章は美しいが、意味ははっきり分らない。イスラム教は剣を手に取ると、どうして儒教的になるか。実際にはこの文章は意味と関係がない。その例えだけが大事である。天心はその例えで儒教とイスラム教の間にレトリックなリンクを

作り、イスラムもアジアの内に引つ張る。イスラム教はこの意味のはつきりしない文章の力で天心のアジアに入った。だからイスラム教はあまり強くアジア的ではなかった。一番弱いグレイドのアジアであった。

天心は「東洋」と「アジア」を同じ意味で使った。本のタイトルはアジアの理想ではなく、東洋の理想だったので、東洋という意味の方が強かったと判断して間違いいはないだろう。同じ一九〇二年に同じインドで書いた「東洋の覚醒」でもアジアの西の境は地中海にあった。この本の中で天心は汎アジア同盟という表現も使った。²⁴ その同盟の中にヨーロッパと戦う為のイスラムの国々があってもいい。しかし、今回の話もまたそれで終わった。イスラム教に対して戦争の意味しか持っていなかった。イスラム教はヨーロッパ的に見たアジアに入っても、日本から見た東洋に入れる理由はなかった。

ボストンで一九〇四年の日露戦争の時に書いた「日本の覚醒」では天心の議論のしかたが変わった。アジアとヨーロッパの対立をなくして、文明と野蛮の対立を使い始めた。²⁵ この変化でイスラム教もモンゴル系人もアジアから落ちた。アジアと東洋の他に同じ地域に対して「仏教国」という言葉も使った。²⁶ 仏教国は複数ではなく、単数の言葉である。元の英語の本では *Buddhaland* という言葉を使っ

た。仏教国は仏教の影響を受けた地域の意味を持ち、平和的な文明圏であった。イスラム教、モンゴル民族、そしてロシア帝国はこのアジアの文明圏の周りにある野蛮な性格を持った軍事的な脅威に過ぎなかった。アジアは一つといっても、天心のアジアはヨーロッパで想像していた非ヨーロッパとは完全に違った。日本人の立場から地域的な仲間の絵を描き、その絵の上にアジアという名を付けた。この解釈でアジアという隠喩にとても良い意味が入った。同時に、アジアの西の境がどんだん東の方に、つまり中国とインドの国境のところに移った。或いは、鎖国時代の世界図を考えると、天心がインドに住んでいた間だけ西の方に広げ、インドを離れた時にまた仏教、儒教と道教の地域に戻った。

九 汎アジア同盟

天心が英語で書いた本を日本語に訳したのは一九二二年だった。そして「東洋の覚醒」は皇紀二六〇〇年、つまり西暦一九三九年に日本語で出版された。だから一九〇〇年代の初め頃には天心の影響は日本であまり大きくはなかった。にも

かわならず、天心と同じようなアジアの評価を高め、アジア人の交流を促進させる意見と運動は特に日露戦争の後発生した。特に大事なのは亜州和親会であった。中国、朝鮮、ベトナム、フィリピン、インドなどのアジアの国から留学生が日本に流れて来た。日本の経済発展、ヨーロッパ帝国主義の扱い方、技術などを熱心に勉強した。亜州和親会の中でヨーロッパ帝国主義に抵抗するアジアのリーダーとしての日本という概念が発生した。²⁷ この時始めて「アジア人」は自分の地域に対して「アジア」という地名を使い始めたが、実際には他の地名はなかった。フィリピンからインドまでという地域はここまで協力をしたことはなかった。自らの地名もなかった。ヨーロッパ製の地名だけが存在していた。日本も欧米に対して何かの同盟を作りたかったので、「アジア」という言葉を使い、「脱欧入亜」の方向に動いた。

中国の孫文、そしてインドの独立運動リーダーのラシュ・ビハリ・ボセ (Rash Bihar Bose) が日本で過した。フィリピンの独立運動も同じように個人的に日本から支持された。亜州といっても、天心のアジア観と同じように、この頃の具体的な交流はあまりイスラム圏まで達しなかった。大東亜戦争の時日本軍が汎アジア同盟のスローガンをうまく利用した。ヨーロッパの国々の植民地軍のアジア

人兵士は日本軍にあまり抵抗しなかった。少なくともヨーロッパ反対の意味で精神的な汎アジア同盟は存在したし、日本軍はその利益を受けた。しかし、大東亜共栄圏の中の暮らしは大変苦しかった。そして日本は結局戦争で負けた。それでこの日本がリードしたアジア同盟の過程が終わってしまった。特に日本占領下にあった国々にとって「アジア」という言葉の意味は悪かった。

十 アジア協力

しかし、アジア同盟、或いはもっと小さな意味でいえばアジア協力の概念は消えなかった。日本は合衆国占領下にあり、中国は内戦の方向に向かっていたので、インドが新しいアジアのリーダーとしての役に上がった。第二次世界大戦後アジアとヨーロッパはある意味で二百年ぶりに同じ位置にあった。どちらも貧乏で飢えに苦しんでいた。国連が一九四六年に合衆国の食糧援助を分配する為に The Economic Commission for Europe (ECE、欧州経済委員会) を設立した。インドはアジアにも同じような委員会を作る為にアジアにディプロマティックな力を

注いだ。同じ一九四六年に国連が The Economic Commission for Asia (ECA、
亜州経済委員会) を設立する決定をした。アジアとヨーロッパは同じレベルの地
域として認められた。しかし、幾つかの国が「アジア」の地名を嫌っていた。特
にフィリピン、中国と韓国の代表者がアジアではなく、極東 (Far East) の方が
自分の国に対して好ましい地域名だと発表した。それで結局一九四七年に上海で
集まった委員会の名は The Economic Commission for Asia and the Far East (ECAF
AFE、亜州極東経済委員会) になった。²⁸ アジアの意味は悪かったので、その地
名だけを使って必要な経済援助の為の委員会は作れなかった。

一九四七年から激しくなってきた冷戦のせいで地名の使い方がまた変わった。
資本主義側と社会主義側は別なキャンペーンになり、別な用語を使った。イデオロギ
的な世界観が強くなり、地理的な世界観が弱まった。社会主義圏の国々、特に中
国と北朝鮮はアジアというよりも社会主義圏の一員になった。ヨーロッパでは冷
戦のせいで ECE の活動の場がなくなった。それで一九四七年にパリで
Organization for European Economic Cooperation (OEEC、欧州経済協力会議)
が設立された。インドはアジアに同じような会議を作りたかった。一九五五年に
結局アイゼンハワー合衆国大統領がアジアのマーシャル・プランの提案をした。

それでインドが速く Organization for Asian Economic Cooperation (O A E C、亜州経済協力会議) を設立する為に共産主義でないアジアの国々の代表者をシムラという町に誘った。しかし、O A E C は作れなかった。会議に参加した国々の意見がアジエンダの一つのことについても一致しなかった。²⁹ アジアは地域的なユニットではなかった。お互いにけんかをしてきた国々に対する地名だけであった。

この時期のアジアの西の境を探すのは難しい。アジアの意味ははっきりしていなかったし、地域名に対する関心が低かったので、その境も不明だった。その地名を強く使った一つの国際会議が一九五五年に開かれた。インドだけではなく、他の国にもヨーロッパと競争する態度があった。そして、一九五〇年代に独立したアジアとアフリカの国々に欧米の新帝国主義反対の議論も増えて来た。シムラ会議が駄目になったので、インドネシアのバンドンという町で新しい非欧米・非軍事大国の会議が開かれた。この会議の準備の中心にインドとエジプトがあった。エジプトはアフリカの国なので、アフリカ全体の独立した国々を会議に誘った。それでアジア・アフリカ会議が行われた。全部の国々が非大国・非帝国主義の態度を取っていたので、会議は割とうまく行った。お互いにアジア・アフリカ人同士で貿易圏を作り、経済、技術と文化の協力を行い、自分の力で経済発展に向か

おうというような意見が強かった。しかし、工業技術を持たず、経済力もほとんどなかったのも、この会議の具体的な成果はあまりなかった。そして、アラブ・イスラム教の人々は自分のことをアジア人でもアフリカ人でもないというふうに考えている。この後も幾つかの会議があった。最初はアジア・アフリカ・アラブ会議という名を利用しようとしていたのだが、結局地域名を使うのを全くやめた。最初の会議のことを今ほとんど誰もアジア・アフリカ会議として覚えていない。バンドン会議という名に変わった。会議の過程でどんどん新しい国も参加した。一九六〇年代になると、ヨーロッパのユーゴスラビアとアメリカのキューバが入ると、世界的な会議になり、非同盟運動として知られてきた。一九七〇年代にヨーロッパのフィンランドとスウェーデンもニュートラルなオブザーバーとして参加した。だから結局この会議はアジアに特別な関係がなかった。冷戦下のこの運動の中のアジアには境はなかった。境なしで全世界に溶け込んだ。

欧米日の一九五〇—六〇年代の学問的な論文とマスコミの印象を読むと、アジアの意味は何かというと、大体東南アジアと同じだった。フランスの地理・民俗学者コンラード・マルテ・ブルーン (Conrad Malte-Brun) が一八三七年に南東アジア (Asie du Sud-Est) という地名を作った。この地名には文化的意味があっ

た。つまり、インドと中国は自立した文明圏として認められたが、中国の南とインドの東にある地域には特別な自分の文化はなかった。³⁰一八〇〇年代にそれはあまり使われていなかったが、一九四三年に大英軍がセイロンに南東アジア司令部 (South-East Asia Command) を対日戦争の為に作った。これで東南アジアの西の境は不明になった。司令部はインド圏にあり、目的も主にインドの防衛であった。そして、アメリカのマスコミが第二次大戦の時に一般に知られている地名にした。戦後のイギリスの前植民地に対する経済協力を管理する会議もセイロンにあり、この会議はコロンボ・プランという名前であった。アジア自身の経済協力がうまく行かなかったので、結局一九五〇年代にコロンボ・プランが経済発展援助の中心部になった。合衆国もお金を出し、イギリスに関係がない東南アジアの国々も参加した。地理学的にはインド、パキスタンとスリ・ランカは南アジアだが、この頃南アジアと東南アジアの区別ははっきりされていなかった。国建ての問題と経済発展の問題は同じだったので、一つの地域として考えられた。一九五四年に合衆国の指導で設立された Southeast Asia Treaty Organization (SEATO、東南アジア条約機構) の参加国はタイ、ラオス、カンボジア、南ベトナムとフィリピンであったが、パキスタンも加盟国であった。南アジアと東南アジアはあまり

区別はなかった。³¹

この頃の一有名なアジアに対する表現はスウェーデンのグンナル・ミュルダール (Gunnar Myrdal) という経済学者が一九五〇年代の終わりに作った「アジアのドラマ」であった。³² ミュルダールのアジアはやはりインドと東南アジアを一緒にした地域であった。とても貧しくて、経済発展をしようとしても進歩はほとんどなく、暗い将来しか持てないので、アジアのイメージはとても可愛そうであった。日本の経済学者の意見はそれほどペシミスチックではなかったが、日本人にとってもアジアは貧しい後進国の地域であった。地名の使い方も欧米と同じで、日本の東南アジアはインドネシアからパキスタンとアフガニスタンまであり、韓国と台湾もよく東南アジアの内に入れた。日本自身はアジアの国よりも「西側の一員」であり、アジアの国々とあまり関係がなく、アジアから遠く離れた国であった。³³

一九四〇—一九六〇年代の地域協力の面でアジアの境がはつきり見付からなくても、イメージの面で一つの解釈が出来る。アジアはイメージが悪い可愛そうな地域なので、先進的な国にはアジアでないという自己意識を使った。だからアジアは非ヨーロッパ、非社会主義、非中近東、非日本というユーラシア大陸の喧嘩っ

ばい部分であった。ユニットではなかった。

十一 太平洋のアジア

一九六〇年代に新しい種類の地域協力運動が少しずつ出てきた。一九六七年に Association of Southeast Asian Nations (ASEAN、東南アジア諸国連合) が設立された。参加国はタイ、マレーシア、フィリピン、シンガポールとインドネシアであった。その頃はあまり大事な連合体として認められなかったが、少なくともこれで東南アジアは南アジアから概念的に離れた。アジアは駄目なイメージがあったので、アジア協力の話は全て消えた。代って、太平洋協力が新しい話題になった。韓国は一九六六年に Asian and Pacific Council (APAC、アジア・太平洋協議会) というものを日本、台湾、タイ、フィリピン、南ベトナム、オーストラリアとニュージーランドで作ったが、冷戦に参加する協議会であったので、日本とオーストラリアはあまり興味を示さなかった。特に日本はアジアよりもはるかに太平洋の方に向かっていった。一九六七年の三木武夫外務大臣が発表した

Pacific Free Trade Area (P A F T A、太平洋自由貿易地域) の提案は日本のオリエンテーションを示した。日本はどんな国と自由貿易をしたかったかというところ、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアとニュージーランドであった。P A F T A は結局作れなくてもその概念は強く一九七〇年代にいわゆる環太平洋の国々の学者と官僚の間で議論されていた。³⁴

日本はその頃高度経済成長の時代であった。香港、台湾、韓国とシンガポールも経済成長を進めていたし、東南アジア地域でも一九七〇年代に成長率が少しずつ上の方に向かっていった。この経済過程の上にならぬ一九八〇年に Pacific Economic Cooperation Conference (P E C C、太平洋経済協力会議) が設立された。参加国は日本、韓国、合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドと ASEAN 諸国であった。この地域はアジアではなく、太平洋の国、太平洋諸国等のような呼び方があった。西太平洋の国々という言い方もあった。同時にとてもオプティミスティックな「太平洋時代」と「二十一世紀は太平洋の世紀」というようなスローガンが論文とマスコミの中で流れていた。ASEAN の場合にも「東南アジア」というイメージが弱まった。「ASEAN」と片仮名の「アセアン」が地域名としても使われていた。一九四六年に設立された EC A F E も名前を変え、

Economic and Social Commission for Asia and the Pacific (E S C A P、アジア太平洋経済社会委員会) になった。日本はもう前から太平洋の国で、そして韓国とアセアンも十年間ぐらい「脱亜入太平洋」の傾向を示していた。時間として短かったが、イメージ的に南アジアとの関係は切れてしまった。経済的にはとてもダイナミックな明るい将来のイメージに変わった。³⁵

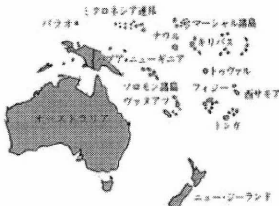
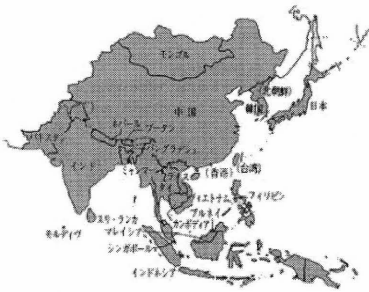
しかし、成功と一緒に自信も出てきた。そして自信だけではなく、域外からの賞賛と批判も出てきた。雁行形態発展論的な「アジアの新工業化国」、「アジア・ニックス」、「アジア・ドラゴン」、「アジア・タイガー」等のような表現は特に一九八〇年代の終わりに欧米から飛び始めた。同時に合衆国との経済摩擦が激しくなり、色々な経済に関する衝突があり、労働者状態等についても批判が欧米から出た。また中国も一九八〇年代に強く地域的な経済協力の中に入り、高度経済成長の波にのり、地域のオプチミスチックな雰囲気に加わった。しかし、中国は西太平洋という地域名には乗らなかった。自己意識は「海国」ではなく「陸国」であった。そして、経済成長、先進国からの直接投資等を求めてもアメリカとかオーストラリアとは同じ運命圏の仲間であるという意識はあまりなかった。太平洋よりも中国の運命圏は東アジアの隣国であった。第二次世界大戦の前

の日本と同じように欧米ソ連圏と違う仲間を作る為に中国、そして中華系の学者が「西太平洋」の代わりに「アジア」という言葉を使い始めた。欧米との経済摩擦中のアニックス、アセアン諸国と日本もアジアに新しい興味を示していた。それで一九八〇年代の中旬ころから西太平洋という呼び方は静かに消えてしまった。この地域の国々はアジアに戻った。

しかし、同時にアジアという隠喩の意味がまた大きく変わった。素晴らしい経済発展のダイナミックなイメージが隠喩に加わり、貧しく可愛そうなイメージがインド圏だけに残った。従って、アセアンも簡単に東南アジアだけに帰ったわけではない。日本も一九八〇年代に同じアジアの船に乗り始めた。一九八六年安部晋太郎外務大臣がアセアン訪問中の発表で「東南アジア」という地名を止め、「東アジア」を使い始めた。³⁶ 換言すれば、安部がこの隠喩でアセアンを日本と同じ仲間に入れた。その後他の日本の政治家も同じ表現をアセアン訪問中に使った。

一九九〇年代は一九九七年まで特にアジアの時期であった。マハティール・マレーシア首相が一九九一年に East Asian Economic Group (E A E G、東アジア経済グループ) の提案をし、アセアン、日本、中国と韓国だけの経済協力圏を作

ろうとしていた。太平洋時代は一九九四年からアジアの時代とアジアの世紀に変わった。³⁷ この経済発展の勢いと、とても面白い議論の中で研究者もマスコミも南アジアの可愛そうな話を出来るだけ避け、東アジアだけに興味を示した。だから今日のアジアのイメージは主に東アジアにある。日本にとってこれはある意味で自然な話し方である。日本の外務省は一九九〇年の「我が外交の近況」にこのようなアジア図を使い始めた。これは鎖国時代のアジア図と岡倉天心のアジア観にとっても似ている。パキスタン、インド、中国、フィリピン、マレーシアとインドネシアと共にイスラム教も少し入っているが、それほど強くは入っていない。モンゴル民族も少ししか入っていない。経済と外交の面で見てもアジアは日本の解釈で昔の中国とインドの文化圏と同じである。二〇〇年が経っても大して変わらない。オーストラリアもニュージーランドも西太平洋の国なので同じアジア図の中に入っている(図



第12図 アジアおよび大洋州
外務省 (1999) 外交青書、1頁。

12)。一九九五年にガレー・エヴァンス (Gareth Evans) オーストラリア外務大臣が「アジアの国としてのオーストラリア」という政策さえ出した。だから、この日本の解釈ではアジアの西の境は中国とパキスタンの西の国境である。

十二 終わりに

この四五〇〇年間にアジアという隠喩は世界中に広がり、色々な意味を含んでいた。アッカド帝国の「日の出」からギリシア地理学の大陸名に移った。アリストテレスのペルシャに対する政治論から中世キリスト教の一番尊敬された神聖な方向に。イエズス会員の文明圏から中国地理学の夷が放浪する狭い地帯に、そしてアリアン論のモンゴル黄禍の発生地区に。天心の文明圏から大東亜共栄圏に。貧しく可愛そうな後進国地帯から今日の経済危機から再び立ち上がるうとするダイナミックな経済発展の協力圏に。

隠喩の内容によってアジアの西の境も激しく動いた。アナトリアから神話の川に、ポーランドの国境からウラル山脈に、民族学的にはイギリス海峡まで広げ、

日本的な解釈で東洋と同じ文化圏になった。アジアは色々である。

これからの変化も激しいかもしれない。一方、アジアの意味が広がる傾向が見られる。つまり十五年前にほとんど使われていなかった中央アジアは今日普通の言葉になつてゐる。ロシアの国内政治がうまく行くかどうかということによつて北アジアと西アジアが見えて来る可能性もある。ロシアが小さな部分に分かれれば、ロシアという国号が使えなくなるので、アジアの名を使う可能性が高い。

他方、アジアの意味が狭くなる傾向も考えられる。ヨーロッパ地理学では昔の地中海に意味があつたが、今のユーラシア大陸に対してその地理学の地名はあまり意味がない。二〇〇年前、一〇〇年前ヨーロッパが強かつたころヨーロッパ人が自分の地理学を力強く世界中に広げたが、その後はヨーロッパは比較的弱まりの道を歩いてゐた。人口のことだけを見れば、国連の数字によると、ユーラシアで今五人の中の一人がヨーロッパ人であるが、二一五〇年には十人の中の一人だけがヨーロッパ人ということが予想される。中近東のアラブ・イスラム地域はもうあまりアジアの概念に入っていない。ロシアが大国として生き残ればアジアの意味を広げる必要はない。東アジアではアジアの概念はそんなに深くはない。中国人は今でも「亜細亜」にあまり興味がない。

柳、杉、檜、山桜、檜、榛の木等が沢山あれば「林」とか「森」という言葉が必要である。そのような上のレベルのよりアブストラクトな言葉がないと、樹木名を会話にならない程沢山箇々に言わなければいけない。同じように、東アジアに地域的な国際協力の過程があれば何かの地域名が必要である。アジアは今そのアブストラクトなカテゴリーとして使われている。³⁸この意味でアジアは掛け布団である。この地域の国々の上に置いてある薄いカバーだけである。しかし、「東土」、「東洋」、「仏教国」、「西太平洋」、「文明圏」、「中原」等のような色々な地域名が歴史の中で見られる。欲しければ新しい地名も簡単に作れる。換言すれば、掛け布団を替えることが出来る。どんな隠喩を選んでもその中に入る仲間がいつも違うし、それによって政治的な問題も起きる。にもかかわらず、今から一〇〇年後に「アジア」は普通の言葉かあるいは歴史学者だけが使う言葉かということとは分からない。全く不明である。

注

- 1 フィンランド、スウェーデン、デンマーク、ドイツ、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ、イギリス、アイルランド、フランス、ポルトガル、スペイン、イタリア、オーストリア、ギリシャ。欧州十五カ国という言い方もある。
- 2 タイ、ベトナム、マレーシア、フィリピン、シンガポール、ブルネイとインドネシア。日本、韓国、中国とASEAN七カ国のことをアジア十カ国ともいう。
- 3 これは中央アジア研究所の解釈である。http://cari.727.net/。ロシア語のСредняя Азияも同じソ連から独立した国々のことを表す。しかし、Harvard Forum for Central Asian Studiesはもっと広い解釈でロシアのトルコ系人が住んでいる地域とイスラム教が主な宗教である地域を中央アジアに含む。つまりチエチエン、ダゲスタン、イングシエチア等も入る。タタルスタンを含むと、中央アジアはほとんどモスクワまでである。同内容かそれに近い地名はいくつもある：Caspian Basin, Caucasus, Transcaucasia, Northern Caucasus, Volga Basin, Eurasian Steppes, Inner Asia, Southern and Western Siberia, Central Eurasia。http://www.fas.harvard.edu/~casww/CASWW_Definition.html
- 4 Lakoff and Johnson 1980.
- 5 Klein 1966.
- 6 Wessen 1968.
- 7 アリストテレス、政治学Ⅶ・7
- 8 Mikelli 1993.
- 9 Mappaemundiは複数で、一枚の地図に対する単数は mappaemundi である。

- 10 Delanty 1995, 36-7.
- 11 Laitia 1995; Mikkeli 1995.
- 12 セメード 1983, 315.
- 13 この説明はリッチの「一六〇二年に出版された「坤輿萬國全圖」の前書きに出ている。利瑪竇 1996 を見よ。
- 14 Neumann 1996, 11-12.
- 15 Mikkeli 1993.
- 16 Hauner 1990.
- 17 日本人に芬の漢字を教えると、やはり芬人はフィン族の内に入っている。この漢字を付けたと思うらしいが、これは誤りである。当て字に過ぎない。この字を始めて使ったのは中国人の徐繼畲という地理学者。一八四八年に出版された「瀛環志略」という本の中に出ているが、フィン人議論より前の論文であるし、中国人なので、徐にとつては「芬」と「匈奴」は関係がなかった。ハンガリーに匈牙利という漢字の国号をつけたが、実際にハンガリー人も匈奴には関係がない。同じ東から来た強力な民族だから、中欧で新しいフィンとして考えられただけである。
- 18 Keniläinen 1993.
- 19 Keniläinen 1993.
- 20 WOG とさうのは「wily Oriental gentleman」つまり狡い東洋人を意味している。
- 21 Kirkinen 1995, 92.
- 22 松田一九九八、42—3

- 23 岡倉一九八〇、14
- 24 岡倉一九八〇、163
- 25 稲賀一九九八、128
- 26 岡倉一九八〇、179
- 27 松本一九九四、11—13、114—8
- 28 Singh 1966. 18-25.
- 29 大来一九五六、22—27
- 30 Brocheux 1994; Brunet 1995.
- 31 Emmerson 1984.
- 32 G・ミユルダール一九七四
- 33 渡辺一九九二、78—95
- 34 Korhonen 1994.
- 35 Korhonen 1998.
- 36 安部一九八七
- 37 石原とマハティール一九九四
- 38 金貞禮助教授のアイデア

使用テキスト

- ・安部晋太郎（一九八七）ASEAN拡大外相会議における安部外務大臣演説、外務省、我が外交の近況、第31号、東京、大蔵省印刷局、31—21。
- ・アリストテレス（一九六二）政治学、東京、岩波文庫。
- ・Brocheux, P. (1994) 'Ne pardons pas le Nord', *Lettre de l'afrique*, 34, 2-3.
- ・Brunet, R. (1995) *Géographie Universelle. Asie du Sud-Est, Océanie*, Paris: Belin/Reclus.
- ・Delanty, G. (1995) *Inventing Europe. Idea, Identity, Reality*, London: Macmillan.
- ・Emmerson, Donald K. (1984) 'Southeast Asia: What's in a Name?', *Journal of Southeast Asian Studies*, 15, 1, 1-21.
- ・船越昭生（一九八六）鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究、東京、法政大学出版社。
- ・外務省編（一九九九）外交青書。新たな世紀に向けたリーダーシップのある外交の展開、第二部、東京、大蔵省印刷局。
- ・Harley, J.B. and Woodward, David (eds.) (1987) *The History of Cartography. Vol. One, Cartography in Prehistoric, Ancient, and Medieval Europe and the Mediterranean*, Chicago and London: The University of Chicago Press.
- ・Hanner, Milan (1990) *What Is Asia to Us? Russia's Asian Heartland Yesterday and Today*, Boston, London, Sydney and Wellington: Unwin Hyman.
- ・稲賀繁美（一九九八）岡倉天心・柳宗悦・魯迅—東洋美術観をめぐって、比較文学別巻、第一回東亜細亜比較文学学術発表論文集、韓国比較文学会、125—

- ・ Kemiläinen, Aira (1993) *Suomalaiset, onto Pohjoian kansa. Rorteoriat ja kansallinen identiteetti*, Helsinki: SHS.
- ・ Klein, E. (1966) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*, Amsterdam, London and New York: Elsevier.
- ・ Korhonen, Pekka (1994) *Japan and the Pacific Free Trade Area*, London and New York: Routledge.
- ・ — (1998) *Japan and Asia Pacific Integration. Pacific Romances 1968-1996*, London and New York: Routledge.
- ・ Laitila, T. (1995) 'Suomensukuiset ortodoksit idän ja lännen rajalla: rajan merkitys kulttuurien kohtaamisessa ja ymmärtämisessä, in Tuulja Saarinen ja Seppo Suhonen (toim.) *Kohdat, karylaisiset ja setukaistet. Pienet kansat maailmojen rajoilla*, Kuopio: Snellman-instituutti, A-sarja 19, 25-36.
- ・ Lakoff, G. and Johnson, M. (1980) *Metaphors We Live By*, Chicago and London: The University of Chicago Press.
- ・ 利瑪竇 (一九九六) (平成八年)「萬歴30年」坤輿萬國全圖、京都、臨川書店。
- ・ マハティール、石原慎太郎 (一九九四)「NO」と言えるアジア—対欧米への方策、東京、光文社。
- ・ 松田宏一郎 (一九九八)「亜細亜」の「他称」性—アジア主義以前のアジア論、年報政治学、33—53。
- ・ 松本健一 (一九九四) 近代アジア精神史の試み、東京、中央公論社。
- ・ Mikkelil, H. (1993) *European idea*, Helsinki: SHS.
- ・ 南波松太郎、室賀信夫、海野一隆編 (一九六九) 日本の古地図、大阪、創元社。
- ・ ミュルダール、G。 (一九七四) アジアのドラマ—諸国民の貧困の一研究、東京、東洋経済新報社。

- ・ 諸橋轍次 (一九八四) 大漢和辞典。東京、大修館書店。
- ・ Neumann, I. B. (1996) *Russia and the Idea of Europe. A Study in Identity and International Relations*, London and New York: Routledge.
- ・ 大来佐武郎 (一九五六) 東南アジアの發展理論、東京、日本外政学会。
- ・ 岡倉覚三 (一九七九—八二) 岡倉天心全集、東京、平凡社。
- ・ セメード・アルウアーロ (一九八三) [Imperio de la China, i Cultura evangelica en el por los Religiosos de la Compañia de Jesus, Madrid 1642] チナ帝国史 マツテオ・リッチ、中国キリスト教布教史、東京、岩波書店、259—544。
- ・ 岡本良知 (一九七三) 十六世紀における日本地図の發達、東京、八木書店。
- ・ Singh, Lalita Prasad (1966) *The Politics of Economic Cooperation in Asia. A Study of Asian International Organizations*, Columbia: University of Missouri Press.
- ・ 渡辺昭夫 (一九九二) アジア・太平洋の国際関係と日本、東京、東京大学出版会。
- ・ Wessén, E. (1968) *Vära ord, deras uttal och ursprung*, Stockholm: Språkförlaget.
- ・ 徐繼畲 (一九六八) 「道光30年」瀛環志略、台北、中華文史叢書、京華書局。

発表を終えて

4月11日の発表が終わってから日文研の友人に円山公園まで案内してもらった。先日海外会議から日本に帰って来、もう桜は咲いていないと恐れていた。せっかく何年ぶりに日本で一年間ぐらい過ごすことになったので、お花見が出来ないともったいない。でも幸いに春が寒く、まだ咲いていた。京都はちょうど満開の時期になったばかりだった。古くて大きい枝垂れ桜も満開。円山はお花見に来た人でにぎやか。彼らとお花を見、たこ焼きを食い、ビールを飲みながら何時間か公園で遊んでいた。闇になり、枝垂れ桜にライトが付き、とても立派だった。本当に印象に残った。あまり面白かったので、次の夜娘と5人の来日したばかりの芬人を円山に連れて行って上げた。花見は彼らの最初の日本の印象になった。やはり花見はとても気持ちの良いことだ。

白幡洋三郎が今年の春「花見と桜」という本を出版した。彼の解釈で日本の花見の意味は群桜・飲食・群集ということだし、厳しく見ると、花見は日本にしかない祭りだ。しかし、初めて花見を経験していた5人の親戚も異文化の中に入ったわけではない。すぐ全部分かった。フィンランドに勿論日本桜のような木はないし、うわみず桜、林檎、七竈等が咲いている時にはまだ寒く、土には座れない。では、どうして日本の花見は芬人にとってはある程度内文化に感じるのか。群桜・群集・飲食はなくても芬蘭に群夏・群集・飲食というような遊びがある。Juhannus (ユハヌス) はクリスマスの後毎年二番目の大事な祭りだ。6月21日ごろには零下の夜はもうない。ちょうど白夜のころで、闇もない。森と野原の花が満開で、庭にユハヌスばらが咲いている。5百万人のフィンランド人が友人・親戚・家族同士で20万湖の湖の湖岸に集まり、サウナに入り、白樺の香り葉っぱで洗い、裸で湖で泳ぎ、焚き火を作り、特別なユハヌスパン等を食いながら酒を飲む。暗くはならないが、夕焼けは上の空と下の湖で何時間も青、黄色、赤と紫で輝き、その内朝焼けに変わる。完全に明るくなってから寝に行っても良い。次の日はいつも休みの日だ。

だから発表の後の夜、円山でビールを飲んでいた時に「今年はユハヌスを適当に過ごせないが、幸いにまた一回花見が出来て良かった」と思った。同じではないが、ちょっと似ている。

Pablo Uru

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	巖 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに—」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本にきた中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウイトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McARTHUR 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST III 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトローブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 －科举制度をめぐる－」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り－平安朝文学の特質－」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDEWALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と偽作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880~1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) Francois MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹盪 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Liudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sung 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦8	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「雷神思想の源流と展開－日・中比較文化考－」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧0	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュージナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Silvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨2	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリスル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨5	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
⑨6	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨7	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に -」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン・ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員 教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

104	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者――休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才―語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に―金井美恵子の小説における映画的身体」
108	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ― 詩的イメージとしての典故 ―」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日 文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪⑪	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』 - 安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪⑫	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 「『道行き』と日本文化 - 芸能を中心に」
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Glenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪⑭	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 「『中』のシンボリズムについて - 宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義 - 沖縄からの挑戦」
⑪⑯	11. 3.16 (1999)	エドウィン A. クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑰	11. 4.13 (1999)	ウィリアム J. タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」

118	11. 5.11 (1999)	金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟－高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ－日本の言葉に反映された文化の特徴－」
120	11. 7.13 (1999)	リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニング コンサルタント・日文研客員助教授) REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
121	11. 9. 7 (1999)	宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン ノエル ロベール (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) Jean-Noël A. ROBERT 「二十一世紀の漢文－死語の将来－」
123	11.11.16 (1999)	ヴラディスラフ ニカノロヴィッチ ゴレグリヤード (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブル ク支部極東部長・日文研客員教授) Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14 (1999)	楊 曉捷 (カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) X. Jie YANG 「鬼のいる光景－絵巻『長谷雄草紙』を読む－」

⑫5	12. 1. 11 (2000)	エミリア ガデレワ (日文研中核的研究機関研究員) Emilia GADELEVA 「年末・年始の聖なる夜—西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究—」
126	12. 2. 8 (2000)	李 応寿 (韓国・世宗大学校副教授・日文研客員助教授) LEE Eung Soo 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3. 14 (2000)	アンナ マリア トレーンハルト (ドイツ・デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) Anna Maria THRÄNHARDT 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫8	12. 4. 11 (2000)	ペッカ コルホネン (フィンランド・ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) Pekka KORHONEN 「アジアの西の境」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2000年10月20日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp/>

問合せ先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

© 2000 国際日本文化研究センター

■ 日時

平成12年 4月11日(火)

午後 2時～ 4時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

第一回 西の境 入ルカコル本本 日本文化研究